ふ る さ と

第　２０　号

畑の冬じたく

目　次

H.29 第３回麻生ふるさと交流会 …… (1)
講演要旨：麻生の民話 …… (4)
講演要旨：麻生歴史ロマン（２） …… (7)
巨大ムカゴの話（その２） ……(11)
あさお大好き！日記 ……(13)

発行：2017 年 12 月 9 日（第 20 号）
発行：麻生ふるさと交流会事務局
担当：平塚 征英、横田 彰夫

麻生ふるさと交流会

表紙写真：平塚　征英 さん
タイトル：畑の冬じたく
撮影月日：2017.12.3
撮影場所：多摩区細山の畑で
記　　事：巨大ムカゴの栽培をお願いしている友人の畑へ行った帰りに。

「麻生ふるさと交流会」ホームページ
http://web-asao.jp/hp2/asao-furusato/

平成29年度・第3回麻生ふるさと交流会

場　所：麻生市民交流館　やまゆり
日　時：平成29年10月7日(土)
13 時 30 分～16 時 30 分
参加人数 26 名、懇親会参加 24 名

第1部　麻生ふるさと交流会（13:30～15:10）司会：宮本事務局長

- 開会の辞…宮本事務局長

会長が 30 分ほど遅れますので、とりあえず今日の予定の説明がありました。

いつも受付ご苦労さま

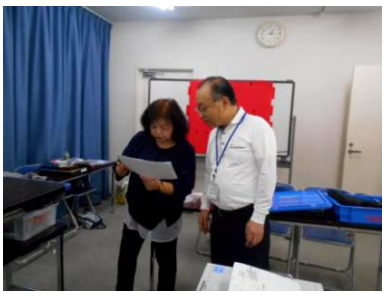
司会：宮本さん

参加者の皆さん

I.　**宮川悦子さん：講演「麻生の民話」**　…講演要旨はp4を参照ください。

お手製の立体紙芝居風の丁寧なお話でした。セリフを初めとし、手造りの登場者の動物や人物・背景の付替え・操作等を、たったお一人で奮闘されました。

登場する人・動物・背景


鉄砲の音ドーン！打合せ

大奮闘の宮河さん

✧　**鳩と兄弟(上麻生に伝わる民話)**

昔、山の中に二羽の兄弟のハトが住んでいました。仲の良い二羽のハトはどこへ行くのも一緒でした。道端で拾った一粒の豆も二つに割って食べるほど仲が良かったのでした。
・・・・・・・・・・それからは、山で鳴くハトの声は「おとうとおととう」と鳴くのだそうです。

✧　**娘と父親のやさしい心（早野の龍ヶ谷池）**

むかしむかし早野の里に父親と一人の娘が暮らしておりました。娘は村中で評判な働き者できりょう良しだったそうです。娘はある日山で、ヘビがウサギを飲み込もうとしているのを見て・・・・・・・・・・・・龍をかわいそうに思った娘と父親は、龍を丁寧に葬ってやりました。その龍を葬った所が早野の『龍ケ谷』なのだそうです。

✧ **コンちゃんのお嫁入り（多摩区細山）**

細山・よみうりランド・フルーツパーク・多摩遊歩道・この辺り一帯はコンちゃんの住み家です。
秋の取り入れも終わり、大豊作にみんな大喜びです。いよいよコンちゃんの晴れのお嫁入りの日がやってきました。
・・・・・・・・・・・・今でも、この土地の人々は、一方に日は照り、一方に雨の降るのを『キツネの嫁入り』と呼んでいます。

II. 森信夫さん：講演「麻生区の歴史ロマン（その2）」…講演要旨はp7を参照ください。

✧ DVDによる秋の旧黒川村・はるひ野の散策

森　信夫さん・ガイドの会も

たまのよこやま

西光寺

✧ 小田急線今昔：なぜ生田に二つの駅が出来たか？

✧ 岡上の飛び地のエピソード

II. 事務局からの連絡…宮本さんより

✧ 12 月 9 日と 2 月 10 日に交流会の予定。

✧ 12 月は近藤紀子さんの講演「健康とふるさと」を予定しています。

III. 遅れて到着した会長の挨拶

IV. 会歌”ふるさと”の合唱

✧ 宮本さんの指名により、カラオケ楽会の横田さんと松本(啓)さんにリードして頂きました。

第２部　懇親会（15:20～16:30）　司会：宮本さん

✧ 乾杯の音頭は、いつも懇親会の買出し等の準備をして下さる本間さんにお願いしました。

今回も多くの方々から、有難い差し入れを沢山頂きました。有難うございました。
記載漏れがありましたら、申し訳ありません。
日本酒（大七・生酛一升、大七・生酛四合）、泡盛・琉球王朝、自家製茹でピーナッツ
…宮本、平塚、與那覇、平塚さん

お疲れさまでした！

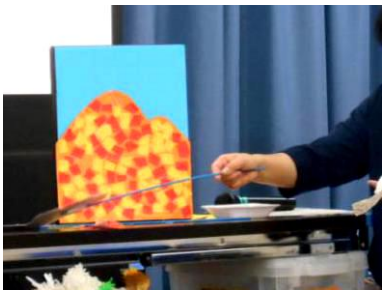
講演要旨：麻生の民話

宮河　悦子

今回お話した「麻生の民話」3話について、原典を多少編集して紹介します。写真は、編集者が当日撮影したものを使用しました。麻生区には、このような民話が残っていたのです！

✧　鳩と兄弟（麻生区柿生）

昔、山の中に二羽の兄弟のハトが住んでいました。仲の良い二羽のハトはどこへ行くのも一緒でした。道端で拾った一粒の豆も二つに割って食べるほど仲が良かったのでした。



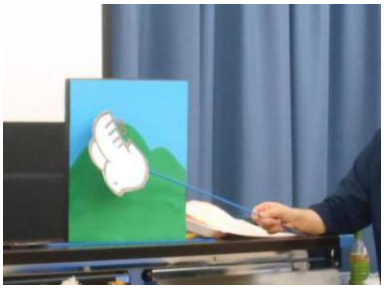
ある年の秋の事でした。赤く色づいたぬりでの木の葉や黄色に染まったけやきの梢を伝わりながら、二羽のハトは木の実を捜しながら楽しそうに飛び回っていました。

その時、里の方から登ってきた一人の猟師が、このハトを見つけると鉄砲でドーン！と撃ったのです。鉄砲の弾は紅葉の葉を散らして飛んで来ました。そして兄さんの方の羽根に当りました。弟のハトは驚いて兄さんのそばに行きました。羽根を半分とばされた兄さんバトは、飛ぶことが出来ませんでした。弟はそれを見ると兄さんを抱えるようにして、枝から枝へ少しずつ逃げました。そしてやっと山の木のほら穴の中にある巣にたどり着きました。

羽根を取られた兄さんバトは次の日から、えさを取りに行く事が出来ませんでした。でも弟バトは山の中を飛び回り、えさの木の実を取ってきて兄さんに食べさせていました。

冬が来ました。山の木の葉も落ちて寒い北風が枯れ枝をならす頃になると、山の木の実もだんだん少なくなりました。雪が降ると何も食べる物がない時もありました。そんな時でも弟バトは畑の雪をわけて、土の中にいる小虫などを取ってきて兄さんに食べさせたので、兄さんバトは日に日に丈夫になり、新しい羽根が出てきました。その代わり弟バトは兄さんにえさを食べさせ、自分は何も食べなかったので、だんだん痩せていきました。それでも夏や秋のように、お腹いっぱい兄さんに食べさせる事が出来なかったので、兄さんバトはひがみっぽくなり、いじわるを言っては弟を困らせました。

ある時、毎日毎日雪が降りました。野も山も真白になり雪は3mも10mも積もり、弟バトの力では畑の虫を取ることも出来ませんでした。それでも兄さんは、「おれはお腹がすいた。早く何か取って来い」と無理を言うのでした。弟は仕方なく雪の降る中を出て行きました。そして1時間も2時間もかかって、やっと雪の中から木の実を見つけ、山の巣のそばまで来た時には力がつき、雪の上に落ちて死んでしまいました。



雪がやみお陽さまがギラギラと光る朝が来ました。兄さんバトは弟バトが、昨日えさを取りに行ったまま帰らないので、「兄を捨ててどこかへ逃げてしまったのだ」と一人腹を立てていました。それでもあまり天気が良いので、巣から出て雪の上に飛んでみました。羽根はすっかり治っていたのでした。あちこち飛び回っているうちに、

だんだん雪がとけて、自分たちの巣の木の下に弟バトが死んでいるのを見つけました。
　弟バトは赤い木の実を口ばしにくわえたまま死んでいました。やせ細った弟バトの胃ぶくろの中には、土や石ころだけしか入っていませんでした。兄さんバトは弟バトのやさしい気持ちが初めてわかり、いつまでもそばを離れませんでした。
　それからは山で鳴くハトの声は「おとうとおととう」と鳴くのだそうです。

『かわさきのみんわとでんせつ』第二集　十四頁

✧　娘と父親のやさしい心

　むかしむかし早野の里に父親と一人の娘が暮らしておりました。娘は村中で評判な働き者で器量良しだったそうです。娘はある日山で、ヘビがウサギを飲み込もうとしているのを見て、娘はヘビに頼みました。「私をあげるから、ウサギを助けてやってください。」助かったウサギは喜んで山に帰りました。
　さて、一方の父親も畑でヘビがカエルを飲み込もうとしているのを見て、ヘビに言いました。「ゆるしてやれ。」 ヘビは「それなら何をくれる。」と聞きました。娘の父親は「なんでもやるよ。」と言いました。「おまえの家に娘がいるだろう。その娘をくれ」とヘビは赤い舌をメラメラ出しながら言いました。娘の父親は、まさかヘビが娘を持っていきはしまいと思って、言ってしまいました。「ああ、いいさ。」

　その夜、家の戸をトントン叩く者がいました。出てみると若い男が立っていました。「約束の物をもらいに来た。さあ、娘をよこせ。」父親はビックリして娘を納戸の中に隠しました。「ちょっと待ってくれ。七日間だけ待ってくれ。」と言って、若者に帰ってもらいました。

　七日が過ぎました。また戸を叩く音がしました。大急ぎで娘を隠して戸を開けると、そこには龍が立っているではありませんか。「だめだ。」と言って、戸を固く閉めてしまいました。
　少し経つと戸の外でドタンバタンと大きな音がしました。家の中で娘と父親は恐ろしさに震えていましたが、外の音があまりにも大きくて激しいので、もう生きた気持ちはありませんでした。

　そのうちに外の物音が静かになりました。「はて～」娘と父親はおそるおそる戸を開けてみると、どうでしょう。そこには血だらけになった龍が倒れており、その周りを沢山のウサギが飛び回っているのです。龍はもう死んで動かなくなっていました。
　龍をかわいそうに思った娘と父親は、龍を丁寧に葬ってやりました。

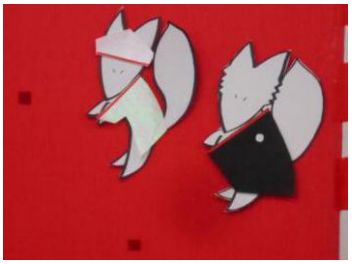
　その龍を葬った所が、早野の『龍ケ谷』なのだそうです。

「ふるさと早野を語る」より

✧　コンちゃんのお嫁入り（多摩区細山）

細山・よみうりランド・フルーツパーク・多摩遊歩道、この辺り一帯はコンちゃんの住み家です。秋の取り入れも終わり、大豊作にみんな大喜びです。

いよいよコンちゃんの晴れのお嫁入りの日がやってきました。「コンちゃん。おめでとう。 今宵嬉しいお嫁入り。晴れのお化粧いたしましょう。」お母さんキツネはコンちゃんを美容室へ連れていきました。ここは『猪の化粧井戸』と呼ばれている所です。よみうりランド側の標高120mの高台で、湧水がコンコンと湧きでて、枯れることがない所です。その昔、イノシシが爪を洗ってお化粧をしたと言われている所です。



「なんと美しい顔でしょう。」「毛並みのすばらしさ、尾の先までもつやつやと光ってなんと綺麗なんでしょう」コンちゃんは水面に映る自分の姿を見て、我ながら惚れ惚れするのでした。

「コンちゃんおめでとう。では門出にあたり、お稲荷さまにご挨拶しましょう。」 お父さんキツネは、よみうりランド続きの鎮守にお参りに行きました。作物が豊かに実ることと一家の繁栄を祈って門出の誓いをするのでした。稲荷は稲生(いわなり)で保食神(うけもちかみ)～食べ物を司る神～がお祀りしてあります。コンちゃんの村里は農家で生計を立てていました。

平和な村里の夕べ。タマノカンアオイの紋所をつけた提灯行列。点々と連なる絵のようなコンちゃんのお嫁入り。うれしさいっぱいの中にも天塩にかけた愛娘との別れ。お母さんキツネは思わず「こんこん」 お父さんキツネも人知れず「くわいくわい」「こんこん・くわいくわい」

それとなしか雨が降ってきました。そしてやがて賑やかな披露宴が始まりました。

「めでためでたのお嫁入りコンちゃんおめでとう。ポンポコのポン。」タヌキの楽団の演奏に合わせて、「めでためでたのお嫁入り。コンちゃんおめでとう。キュッキュッでキュッ。」ウサちゃんチームの耳踊り。

西の空が夕焼けして太陽・お日さま思わずニコニコ照って、村は大満足のるつぼ。

めでたし・めでたし。

今でも、この土地の人々は、一方に日は照り、一方に雨の降るのを『キツネの嫁入り』と呼んでいます。

「土方恵治・伝説さんお達者で」より

講演要旨：麻生歴史ロマン(その2)

森　信夫

旧黒川村の歴史散策～古代の人達が歩いた横山の道と自然の残る黒川の里を歩く～

【旧 黒川村】

黒川の地は麻生区の北西部に在り、南東に栗木、他の方面は東に東京都稲城市、北に多摩市、西は町田市に接しています。

地名の由来は定かでは有りませんが

① 三沢川の源流地帯で多くの谷戸から流れ出る清らかな水底の黒土色が其の侭に目に入り、人々は「黒川」と呼んだ。

② 谷戸田と称する傾斜の谷間に階段状の水田が作られ谷奥の湧水を田に回し灌漑をした際に畔を高く作った為に畔が目立った。畔を「くろ」とも言う事から、畔の目立つ川から黒川と呼ばれた。

③ 川底の砂が磁鉄鉱分を多く含む為に黒く見えた。

等の説が有ります。

当地は室町末期には武蔵国小山田荘に属して「黒河郷」と呼ばれていました。其の黒河郷の地が年代は不明ですが、**御仁々局**(おにゝのつぼね)と言われ女性の領地になりました。

此の御仁々局とは宮中の女御なのか、将軍或いは鎌倉公方に仕える人物なのか定かでは有りません。然し領地を持っていた事から考えると其の身分は推定出来ます。

処が御仁々局領は在地豪族等に依り侵食されるようになりました。

此の頃、既に室町幕府は弱体化して居り出先機関の鎌倉府、其の執事である関東管領も内紛などで弱体化していました。当然、実力者に依る土地簒奪も日常の事で、局は其の状況を鎌倉府に訴えました。

貞治三年(1364)10 月 28 日、鎌倉公方足利基氏の命を受けた関東管領・上杉憲春は黒河郷の半分を御仁々局の領地と認め、沙汰しています。

其の 3 年後、土地の維持が困難となった御仁々局は、鎌倉府へ領地の半分を寄進する書状を認めました。

其処で鎌倉公方の足利氏満は、此の黒河郷の領地を円覚寺塔頭の「黄梅院」へ寄進し続いて残る半地も、黄梅院へ寄進しました。黄梅院の寺領となった黒河郷を巡り、高倉中務大輔が所有権を主張して再び論争が起こりましたが、鎌倉府は応安五年(1372 九月に訴えを却下しています。

然し、応永廿三年(1416)に始まる「**上杉禅秀の乱**」から関東各地での動乱によって特別に保護されてきた寺領の権益も崩れ、黄梅院領も地頭に依って強奪されてしまいます。

黒河郷が「役帳」に記録されるのは、小田原北条時代の天文十二年(1543)の検地で小山田弥三郎の所領役高として現れます。

江戸時代に入ると都築郡黒川村として元和二年(1616)旗本の**駒井親直**が知行します。駒井氏は代々

に亘り武田氏家臣で祖父・高白斎(政武)は高白斎記(甲陽日記・甲斐武田家の用務日誌を基に成立したと言われる)の著者として知られ、父・政直は武田家滅亡後、徳川四天王の一人、榊原康政に属し武田遺臣の代表格と言われます。
親直は大阪の陣で活躍し幕府の使番を勤めますが寛永八年(1631)56 歳で没しました。
駒井氏は上野国・相模国高座郡等を合わせ 1,800 石の旗本ですが黒川の地は慶安期(1648～1652)駒井右京の時で 90 石、幕末期・駒井孝三郎の時では 261 石の記録が残ります。

【西光寺】

曹洞宗の寺院で山号は雲長山です。

狐岩伊俊(こがんいしゅん)大和尚に依って室町時代中期(1400 頃)に開山されたと伝えられていましたが、黒川遺跡発掘調査で平安時代の地層から西光寺と書かれた土器が発見され、開山は平安時代まで溯るのではと思われます。本尊は釈迦牟尼仏で運慶の作と伝えられています。以前、此の寺は近くの高地に在りましたが、昭和四年(1921)に現在地に移りました。
本堂の天井には平成十二年(2000)完成の「雲龍頭」が有り、一般公開は 12 年に一度辰年に行われます。また「龍・麒麟・鳳凰・亀」と言う四霊が安置され瑞気に満ち溢れています。
境内には寛文八年(1668)七月に造立された小さな石仏・薬師如来坐像が祀られて居り、石仏としては市内最古のものです。
裏手の丘には釈迦立像が聳え立ち参詣の人々を迎えてくれます。
黒川には上、中、下の講中があり、西光寺は中、下講中の菩提寺で、上講中の人達は稲城市坂浜の高勝寺の檀家となっています。

【汁守神社】

創建年代は不詳ですが、天明二年(1782)に社殿が再建されました。主祭神は保食命(うけもちのみこと)です。其の昔、府中 大国魂神社の「くらやみ祭」の膳部の汁を献上した起こりだと伝えられています。
かつては獅子舞が奉納され獅子頭が宝物になっています。
現在の本殿、拝殿は明治卅七年(1904)から大正二年(1914)に掛けて独立した構造で新築されました。
正面石段を上がると天保五年(1834)に建立された鳥居があり、広い境内(6,133 ㎡)には川崎市選定「まちの樹 50 選」のやぶ椿があります。
例大祭は 9 月の第 4 日曜日に盛大に行われています。

【セレサモス】

JA セレサ川崎が麻生区黒川に建設した大型農産物直売所です。

施設名『セレサモス』は、ギリシャ語で収穫を意味するセリスモスとセレサを掛けた造語で、公募で決定されました。

敷地面積は 2,939 ㎡で神奈川産の木材も使用された木造平屋造りの建物は延べ 309 ㎡、市内では最大規模の農産物販売所です。

【柿生発電所】

水力発電所として昭和 37 年（1962）に運転を開始しました。

相模湖など相模川水系から取水した水道原水は川崎市水道局により長沢浄水場まで送られていますが、その地形の自然遊休落差を利用した県企業局の発電所です。

出力は 680kwH で、東電に売電しています。

【石造物（地神塔、庚申塔）】

此れ等の石塔は、夫々が別々の場所に有ったと思われますが、何時の頃か不明ですが現在の場所に集められました。

向かって右端に地神塔〔天保十二年 （1841）〕が有り、中央に石祀〔宝暦十四年 （1764）〕、左端に庚申塔〔寛政十二年 （1800）〕が静かに建っています。其の時代の人々の願いが込められています。

【毘沙門天堂・金剛寺跡】

黒川の里を散策していると、廃寺となった墨仙山金剛寺跡地の一画の小さなお堂に行き当たり、其処には毘沙門天像が祀られ地域の守護神となっています。

今でも『柿生の里』を思い出させる里山の風景広がり、夏には田植え後の緑、秋には山の木々が色づき、田畑と土のコントラストが非常に美しい景観です。

行基作の毘沙門天が有ったと伝えられて居り、現在の毘沙門天堂は平成十八年に改築されたものです。

此の近くに真言宗・墨仙山（くろかわさん）金剛寺跡が在り、汁守神社の別当を務めていたと言われています。創建は古い寺でしたが、明治初期に廃寺となりました。

神仏習合の名残か鳥居が有るのが特徴です。

新編武蔵風土記稿に依れば金剛寺は新義真言宗で本尊は大日如来坐像、丈一尺五寸余とあります。

黒川には上、中、下の三つの講中が有り、上講中の人達はこの金剛寺が菩提寺でしたが、廃寺以降は稲城市坂浜の高勝寺の檀家となっています。

【川崎の最高地点(149m)、川崎市水道局 黒川高区配水池】

主に酒匂川水系と一部相模川から取水した源水は、神奈川県内広域水道企業団西長沢浄水場へ送られ、此処で飲料水に処理されて川崎市潮見台配水池、黒川配水池経由で黒川高区配水池に送られます。此の飲料水は黒川地区、はるひ野地区、栗木台地区の一部の家庭に配水されています。

此の配水池の建設工事に伴う事前の調査で、縄文時代の住居跡 16 軒、其の外各種遺構が発見されました。

【たまよこやまの道】

大宝元年(701)大宝律令が施行され、律令制が整うに連れ中央組織と地方組織も徐々に確立していきます。

此処、武蔵の国でも府中に国府が置かれますが、府中から西側の多摩丘陵を見渡すと丘陵が連なり、『**たまのよこやま**』と呼ばれるようになりました。全長 24 ㎞、東は連光寺向ノ丘、西は津久井郡の三沢峠を結ぶ長大な尾根は『**多摩丘陵の背骨**』の異名もあります。

其の昔、武蔵国から防人として 3 年間大宰府に赴任した人達は此の**よこやまのみち**を通って大宰府に行ったと思われます。

此の場所で故郷を振り返り、大切な人との別れを惜しんだのでしょう。

尾根幹線道路を渡り、少し右に進んだところにある展望広場への階段を上ると、標高 145mの『**防人見返りの峠**』と名付けられた広場に出ます。此処からは富士山や丹沢、秩父連峰の山並み等多摩丘陵のパノラマが見渡せます。

「**よこやまの道**」の名前の由来は万葉集、巻 20、第 4,417 の防人の妻の歌から引用されています。

《豊島郡の上丁椋椅部荒虫が妻　宇遅部黒女の歌》

「赤駒を山野に放(はが)し捕(と)りかにて　多摩(たま)の横山(のよこやま)　徒歩(かし)ゆか遣(や)らむ」

（赤駒を山野に放牧して捕らえられず、夫に多摩の横山を歩かせてしまうのだろうか）

巨大ムカゴの話（その2）

平塚　征英

「ふるさと」第18号には、巨大ムカゴを入手してから、5月に植えた頃までの事を述べたが、本号では、その後ツルが伸びて葉も繁り、巨大なムカゴを収穫し、その食べ方などを報告する。

植えてから丁度一ヶ月の 6/3 の写真によると、ツルが左巻き・葉の出方は互生・葉の形はハート形でクビレがない。同じ畑の自然薯は、ツルは右巻き・葉は対生で形はクビレがある形である。
以上から判断すると、巨大ムカゴはヤマイモ類では無さそうである。

ツルは左巻き、葉は互生　　葉の形はハート形　同じ畑の自然薯。右巻き・葉にくびれ

8月初めには大きな葉がたくさん繁り、豆類の害虫マメコガネが葉を食い荒らすが、葉が多いので余り影響はなさそうだ。気が付かなかったが、葉の中の方には、小さいムカゴが出来ていたようだ。

9月になるとムカゴも大きくなり、5㎝大のものが15個以上あるようだ。10月初めには、更に大きくなってきた。月末には同期会で自然薯師匠に披露する予定だが、これなら立派で恥かしくない。

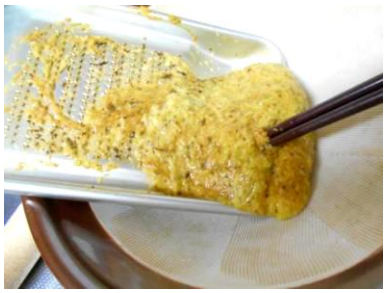
10/20 に第1回目の9個を収穫した。大きさは最大15㎝くらいで、複雑な形のものが多かった。同期会に持参して欲しい方に渡した。11/2 には2回目の約10個を収穫した。
12 月中旬には最後の収穫を行い、根っこの状況を確認予定。自然薯のような芋は出来ないとのネット情報だったが。

最大の問題は食べ方であるが、自然薯の場合と同様な方法を試してみた。
自然薯の場合は、私にとっては、摺りおろしてトロロで食べるのがベストであり、細い物やチョットしなびた物などは、味噌汁や鍋物の具に使うことが多い。摺りおろしたままの物を、海苔で巻いて揚げる磯辺揚げなどもあるが、調理が面倒なので、我が家では全く経験がない。

さて、巨大ムカゴの食べ方は、未だ試し最中だが、皮をむいて適当な大きさに切り、味噌汁の具として使うことがお勧めです。里芋ほどではないが、多少ねっとり感があった。塩ゆで等も良いかも？
自然薯の場合でベストなトロロは、味はヤマイモと同様だが、摺っている間に酸化して色が茶色くなるので、視覚的にはイマイチである。摺りおろす際に酢を垂らすと、白くなるとの話なので試してみたが、その効果はさっぱりだった。

下の写真がトロロを作った際の手順。皮はむかずに酢を使わなかった場合。（自然薯の場合は、滋養分が多い皮付きのまま使うのがお勧め）

おろし金でおろす


スリバチに移す

自然薯と同様なネバリ

すり棒で良く摺ると滑らかに

薄めた麺つゆを注いで摺る

適当な柔らかさ

下の写真は味噌汁の具として使ったものであるが、材料が少なくチョット小さすぎた。

あさお大好き！日記

宮河　悦子

２０１３年９月２８日（土）の『VIVA柿生の里散歩道・まちはミュージアム遊歩道ファンクラブ１５年の歩みから』お祝いの懇談会に多くの人が集い合ってくれました。

１５年前の１９９８年７月５日「柿生の里の散歩道」を沢山の参加者と歩きました。麻生市民館の地域セミナーの企画委員の有志が、右も左も分からないのに市民グループ“まちはミュージアム”を結成しました。資金も集い合う拠点もなく、ただ麻生のまちへの思いだけで……続いてきました。

来年２０１８年に２０周年を迎えます。結成時から毎月発行している“まちはミュージアムだより”が２００７年３月２７日号で１００号になりました。亡き佐々木健吉さん・井上馨さんらが中心に主催してくれた『まちはミュージアムだより１００号記念祝賀会』を２００７年６月２７日に行いました。まちはミュージアムの世話人の亡き和田彰さんが理事をしていた事もあって、オープンしたばかりの麻生市民交流館やまゆりを、登録団体第１番目で休日全館貸切で利用しました。

“まちはミュージアム遊歩道ファンクラブ”の活動は、『里山フォーラム in 麻生』を立ち上げる手助けをする事ができました。その後、“まちはミュージアム”の踏査の様なまち歩きの会があちこちにできていきました。結成当時の麻生のまちへのぞくっとするような発見や驚きは徐々に減っていても、まだまだ求めれば“初めて得れる”「新しい何か」は沢山みつかる様な気がします。麻生のまちへの思いは熱く深く大で“まちはミュージアム”続けていきたいと思います。

１１月の休日。近くの公園へ色づいた葉っぱを拾いに出かけました。もう少し早い時期に来ていれば、鮮やかな色の葉が沢山みつかったでしょうが、セピア色に変色した葉が道にたくさん落ちていて、カサコソ・ガサガサと踏みながら歩くのも悪くない。

途中友人宅へ寄るとひさしぶりと言う事もあって、庭先のサザンカ・センリョウ・真っ赤に色づいたドウダンツツジなど枝を切ってくれ持たせてくれました。コナラやクヌギの落ち葉を拾い、住まいの近くに緑陰公園・緑道があるのに、日々の忙しさの中でなかなか足を運ぶ機会がなかったのです。

ぷっくり丸々のドングリが目にとまり、子供の様にプリプリと輝くドングリを夢中で拾いました。ゆっくり一枝一枝を見ながら赤や黄・橙・紫に色づき、枝に残っている葉っぱを摘みました。

尾根にのぼると富士の山や大山・丹沢の山々が目の前に見渡せ、なんとも言えない充実した感覚が湧いてきます。麻生区には、まだまだ自然の森や林、緑道が残っています。野歩きには最適なフィールドです。そして野歩きは楽しく心が満たされます。

我が家の周りのケヤキの街路樹、美しい紅葉を見せてくれます。その後がいけません。毎日毎日、葉が落ちて、落ち葉掻きに労を費やさなくてはいけません。「落ちて大地に抱かれ、腐葉土への長い旅を始めるはずだ。その足元で続く小さな営みを思えば、丸裸になった冬ざれの木々をも清々しい。」そんな一文が頭をかすめました。コンクリートの大地の街路樹の落ち葉は、掻き集められても腐葉土の旅には出られないのです。都市の中では落ち葉の活用も協約して、実践していかなければならない問題の一つです。ここ数年街路樹は落ち葉になる前、枝が切られてしまうのです。

王禅寺ふるさと公園での自然観察会がありました。
葉を落とした落葉樹は、春に花や葉となる冬芽を準備しています。冬芽は木の種類によって大きさや形がさまざまで、寒さから身を守る方法も、堅い殻で覆ったり、毛や粘り気のあるヤニをまとったりと個性的です。冬芽には、人や動物の顔にみえるような部分があります。この顔の輪郭は、落葉した葉の柄がついていたあと(葉痕)で、その中の目や鼻に見える部分は、葉に養分や水分を送るための管のあとです。

「落ち枝」のことも教えていただきました。枝分かれしている所に、丸い形をした痕のようなものを見つけることができます。拾った小枝の凸型の部分をあてると、ぴたりと納まりました。春になるとどの枝先からも新しい枝が2～3本出てきます。もし毎年毎年小枝が増え続けていたら、超過密で大変なことになってしまいます。木は自らを剪定して、良き樹形をつくるための「落ち枝」現象をしているのです。講師の高柳芳江先生は『なぜ？』と言う発見から、何度も何度も観察を続けるのです。その観察の結果が可愛い絵本になりました。草花遊びや自然観察会の達人でもあるのです。

麻生区区制30周年記念事業実行委員会で、区のシンボルとなる「花」と「木」を募集したことがありました。候補一覧の木はイチョウ・オリーブ・サクラ・ハナミズキなどは現在街路樹に見られる木々です。新百合ケ丘駅ができた翌々年、万福寺に越して来た頃、駅前から自宅までの間に山林が沢山あって、散歩に出かけた夫は、あまりの美しさに一枝折って持ち帰ってしまったのです。まっ白い花がたわわに咲くエゴノキです。深く5裂した合弁花が下乗させて、まるでシャンデリアのようです。高台から遠くの山林に咲くこのエゴノキの花は白い縁取りのように見えてとっても綺麗です。開発された万福寺にも、他の開発された地域にも見られなくなってしまった木です。

柿生を愛した文学者山室静さんも、このエゴノキについて書かれています。
「柿生の家の裏の山道にも、下の県道ぞいの川っぷちにも、いましきりにエゴの花が咲いていて、夜など近くを通ると甘い香りが鼻をうつ。ところによっては道いっぱい落ち散っているほどだ。花は純白で深く五片に裂け、一片一片は卵形をして、やや長い花柄の先に下を向いてつつましやかに咲いている」

錦色に染まった葉っぱたちはみな大地に帰り、その裸木の間からサザンカのえんじ色の花が目に飛び込んできます。肌を刺す冷気の初冬の色を失う季節に凛と咲く花。白鳥神社の大木のサザンカの樹々や、切り通しになって開通した柿生大橋から日光に向かって行くと、今まで見えなかった調整池の淵のサザンカ林。生垣のサザンカ、色鮮やかなたくさんのサザンカの花が楽しめます。
開発前の万福寺の中島豪一さんの裏山に、サザンカが群生している林があった事を思い出し、残っているか探しに行ってみました。たった一本のサザンカの木が名残惜しそうに花をつけ、あのサザンカ林は消えていました。旧郵便局の前から中島邸の長屋門のあるアジサイの小道を、金程へ抜ける坂を登って行くと左側にサザンカ林の森・右側に梅林の畑が広がっていた日本の農村の風景があったのです。